

『ニューノーマル、ニューオーダー、  
ニュークリア&ニューエイジ』

○暗闇

スマートフォンが着信してバイブする音。

○マンションの一室・寝室（夜・雪）

窓の外には雪が降っているのが見える。ベッドで寝ていた広瀬ひかり（30）、サイドテーブルの上でしっこくバイブしているスマホを寝ぼけ眼で手に取り、電話に出る。

ひかり「はい」

電話の相手は何も喋らず、若い女のすすり泣きのようにも笑い声のようにも聞こえる音がする。

ひかり「ミチル？」

ミチルの声「……けて」

声の主は妹の広瀬ミチル（28）。ミチルの声は小さく、何を言っているのかよく聞き取れない。

ひかり「なに？　今度はどうしたの？」

再びすすり泣きのような笑い声のよう  
な音。

ひかり「ねえ。こんな夜中にふざけないでよ。

お姉ちゃん暇じゃないんだよ」

ミチルの声「新しい世界が来るから」

ひかり「はあ？」

電話は突然切れる。

ひかりは苛立たしげにスマホを置いて、  
再び眠りにつく。

( F ・ O )

○都心のビジネス街

季節は夏。車や工事の騒音に交じって  
セミの鳴き声が聞こえる。

スーツを着たひかりと上司の桂木

( 3 4 ) が歩いている。

桂木「暑いなあ。やっぱ、狂ってきてるんじ  
ゃない？ 今年は梅雨らしい梅雨にもなら  
なかつたし」

ひかり「それ、おじさんみたいですよ」

桂木「どれ？ (ネクタイピンを指して)

これ？」

ひかり「すぐに異常気象って言うじゃないですか、おじさんって」

桂木「脳細胞がおじさん細胞になってきているのかなあ……あ、おじさんっぽいなこれ」  
ひかり「おじさん、昇進おめでとうございませう」

桂木「いやいや……島本さんが退職しちゃったからとりあえずの代打だよ。課長代打。そのうち広瀬さんに抜かれちゃうって。」

あ、そうだ。あぶねあぶね」

桂木はポケットからペンダント型の空間除菌タブレットを二つ取り出し、一つをひかりに渡す。

ひかり「え」

桂木はタブレットを首にかけながら、桂木「秘密兵器。前に商談で行った時に先方が付けてたでしょ？　今回で話まとめちゃいたいから」

ひかり「こんなの効果ないですよ」

桂木「わかってるって。でも合わせなきゃ」

嫌々タブレットを着けるひかり。

と、前方から数十人規模のデモ隊の  
シュプレヒコールが聞こえてくる。

拡声器越しの声「光の世界がやってくる！」

声たち「ひっかりの世界がやってくる！」

拡声器越しの声「新しい世界！」

声たち「ニューワールドオーダー！」

拡声器越しの声「正しい未来！」

声たち「ニューワールドジャステイス！」

二人が声のする方を見ると、大規模

ワクチン接種会場の前で「NEW LIGHT

WORLD 光の戦士」と書かれたTシャ

ツを着た人々が警備員と口論しながら

抗議活動をしている。

桂木「なんだよあれ。すごいな」

拡声器越しの声「新しい世界！」

その声に、ひかりは思い出す。

× × ×

(フラッシュ)

雪の夜に受けたミチルからの電話。

ミチルの声「新しい世界が来るから」

○広瀬家・居間（夜）

（このシーンはひかりの想像）

泣いて鼻をすすりながら固定電話の

受話器を置くミチルの後ろ姿。

ミチル「助けて……お姉ちゃん」

○オフィスビル内の会社・応接室

男の声「どうですか？ お盆明けにでも」

ハッと我に返るひかり。そこにはひか

りと桂木の他に取引先の中年男・加賀

がいて、現在商談中。

加賀はゴルフクラブを振るそぶりを

する。

ひかり「すいません私ゴルフはやったことが

なくて。お気持ちだけ頂きます」

加賀「教えますよ。私、そういうの得意だか

ら。ね」

桂木「（ひかり見て）連れてってもらいなよ、ご厚意に甘えて」

曖昧な笑顔を浮かべるひかり。

ひかり「じゃあ、はい」

加賀「そうかそうか、よかった。あれですか、お盆はちなみに、ご予約とかありますか？」  
ひかり「実家に帰ろうと思ってます」

加賀「あそうだよねえ。偉いじゃない、ちゃんと帰るんだ。家族思いだなあ」

視線を逸らして窓の外を見るひかり。

○田園地帯を新幹線が走り抜ける

○新幹線の車内（移動中）

スマホでニュース記事一覧を見ているひかり。トップの記事の見出しは「ロシア外相、戦術核兵器に言及」。スワイプして下の記事の見出しを見ると、「ヘウクライナ難民600万人超える」。その下には「南極氷床の融解速度は予

測以上 米科学者が警告〜。  
ひかりはうんざりした表情でスマホを置いて、仮眠しようと目をつむる。

### ○新幹線の停車駅（夕）

大きなキャリアバッグを引いたひかりがスマホをいじりながら駅から出てくる。  
立ち止まり、顔を上げ、駅周辺の整ってはいるが生気を欠いた風景を眺める。人は少なくセミの声以外は騒音もない。と、どこからか拡声器越しの録音した声が聞こえてくる。

拡声器越しの声「ニューワールドオーダー。  
マスクを外しましょう。ニューワールド  
ジャステイス。ワクチンを拒否しましよ  
う」

拡声器を車体にくくりつけたへ光の境界〜とペイントされた車が視界に入ってくる。その街宣車はこの周辺を周遊



している。

ひかりは街宣車に軽蔑の眼差しをく  
ると、停車しているタクシーに向か  
つて足早に歩いて行く。

### ○広瀬家・門と庭（夜）

住宅地の中にある二階建ての一軒家。  
ブロック塀で囲われた庭には家庭菜園  
と物置小屋と犬小屋がある。

犬のマロンが怯えを隠すように激しく  
吠えているのが聞こえる。

ひかりはその家の門の前に立ち、家を  
眺めている。乗り気でない表情だ。

やがて、ひかりは門の脇の玄関ベルを  
押す。

が、誰も応答しない。

門に手を掛けるひかり。

すると、開く。

ひかりは家の敷地内に入って、犬小屋  
の方へと向かう。物置小屋に向かって

吠え続けるマロンに近づき、

ひかり「マロン。どうした」

マロンを抱きしめて撫でるひかり。

ひかり「よしよしよし。元気してた。久しぶりだね」

マロンの円形脱毛に気付くひかり。

ひかり「あれ、ハゲできちゃってる。どうしたんだあ？ ストレス？」

男の声「お前そこで何してる」

驚いて振り返るひかり。そこには  
N95マスクをし、懐中電灯を手に  
して、緊張した面持ちでひかりを眺め  
る父の広瀬浩（60）が立っている。

浩「なんで急に戻ってきた」

ひかり「お盆に実家に帰ったら悪いの？」

ひかり、不機嫌な表情で玄関に向かい、  
一人家の中に入っていく。

浩は懐中電灯で怯えるマロンを照らし、  
それから急ぎ足で門に近づくと、強い  
力を入れて施錠する。

○同・居間（夜）

ひかりが入ってくると、母親の広瀬

絵里子（５８）が夕食の準備の途中で  
エプロンを締め直しているところ。

絵里子「あら、ひかりじゃない！ どうした  
の急に！」

ひかり「お盆じゃない？ たまには帰った方  
がいいかなと思って」

絵里子、ひかりのマスクを指して、  
絵里子「取りなさいそんなもの！ 家の中  
なんだから。ほら、座って座って」

ひかり、絵里子の勢いに押されてマス  
クを外すと、台所で軽く手を洗って、  
食卓につく。

絵里子、台所に向かう。

絵里子「えー、どうするー。ご飯三人分しか  
作ってないよー。お父さんいらなかな  
ひかり「いいいよ残り物で。そんなにお腹空い  
てないから」

絵里子「ねえお父さん！」

家の中に戻ってきた浩が顔を出す。

浩「頼むから門の鍵はちゃんと締めといてくれ。何度も何度も」

絵里子「はいごめんなさい。ねえご飯どうする？ 食べる？」

浩「（ひかりに）手、ちゃんと洗ったか？」

ひかり「洗った」

浩「石けんでだぞ」

絵里子「ねえどうするのよ」

浩「話すときはマスクしてくれ。食べる時はいいけど」

不機嫌な表情で洋室に入っていく浩。

絵里子「いらないね、はいはい」

ひかり「いいって別に」

浩の分の食事をひかりの前に置き直す

絵里子。

絵里子「じゃこれひかりのね」

ひかり「……いただきます」

絵里子、ひかりのキャリーバッグ見て、

絵里子「あんたずいぶん本格的じゃない？」

ひかり、気乗りせず食べながら、

ひかり「出張帰りに寄ったの。春から新しいプロジェクト立ち上げたから仕事も残ってるし」

絵里子「だからってここにまで持ち込むことないじゃない。お盆休みでしょ？」

ひかり「休みでも休んでらんないの」

絵里子「あそう。無理はしないでよ。あ、さつき出られなくてごめんね。ちよっとお手洗い行ってたからさ」

絵里子、忙しなく台所へ向かう。

ひかり「わかった。わかったって」

居間に置かれた振り子時計の鐘が鳴り、夜7時を告げる。

絵里子「あら、もうこんな時間」

台所からラジカセを持って現れる絵里子。それを床に置いて、再生ボタンを押すと、アイドルソングが流れ出す。怪訝な眼差しで絵里子を見るひかり。

絵里子、曲に合わせてアイドルの振り付けで踊り出す。

啞然として箸を止めるひかり。

洋室から浩が出てきて絵里子の横で同じ踊りを始める。

しばらく踊り続ける絵里子と浩。

曲の一番が終わると、浩はまた不機嫌な表情で黙って洋室に戻っていく。

絵里子も踊りをやめて、何事もなかったかのようにラジカセを台所に戻す。

絵里子「ぬか漬け食べてよ？ 腐らせちゃう

といけないから」

ひかり「え、いや、なに？」

絵里子「んー？」

ひかり「なにやって……さっきなにやってたの。お父さんと二人で」

絵里子、台所から顔を出して、軽くさっきの踊りの振り付けを見せる。

絵里子「アイドルダンス。ひかりもやる？」

ひかり「いややらないけど……なにそれ？」

なんでそんなことやってんの？」

絵里子「あそういうこと？」

絵里子、食卓について食事をしながら話し出す。

絵里子「ほらさっきの、ミチルが引きこもる前にハマってたアイドルよ。こうやって踊ってればそのうち外に出る気になってくれるかなと思ってね。お父さんが言い始めたのよ？」

真顔で引きつり笑いを漏らすひかり。

ひかり「なにその発想。全然わけわかんないけど」

絵里子「大人にはいろいろあるのよ。まだまだお子ちゃまねー」

ひかり「いやいや……」

トレーに載せられた夕食を指す絵里子。

絵里子「それ、ミチルのところ持ってって。

話してあげて。ね」

○同・二階・ミチルの部屋の前（夜）

トレーをドアの横に置いてノックする  
ひかり。

ひかり「ご飯だって。久しぶりだね。どうしてた？」

部屋から返事はない。

ひかり「返事ぐらいしてよ。ご飯、ここ置いとけばいい？」

ミチルの声「置いといて」

ひかり「お、声出るじゃん。ねえなんなの

あれ？ お母さんとお父さん大分おかしいことになってるけど」

再び返事なし。ひかり、少し苛立って、

ひかり「ご飯早く食べちゃいなよ」

階段を降りていくひかり。

下まで降りたところでミチルの部屋のドアが開く音がして、それからトレーを部屋の中に入れる音がする。

振り返って二階を見上げるひかり。

バタンとドアが閉じる音。



○同・浴室（夜）

髪を洗っているひかり。  
シャンプーを洗い流して鏡を見ると、  
磨りガラス状の浴室ドアの向こうに  
ぼうっと横向きの人影が見える。  
驚いて一瞬固まるひかり。

ひかり「お父さん？」

人影は無言のまま去って行く。

○同・居間（夜）

パジャマ姿のひかりが髪をタオルで  
拭きながら入ってくると、絵里子が  
台所で一心不乱にぬか床をこねている。

ひかり「ねえ、さっきお父さんお風呂来なか  
った？」

絵里子「んー？」

ひかり「なんか気持ち悪かったんだけど」

絵里子「えー？」

ひかり「ねえ、聞いてる？」

絵里子「聞いてるよー」

ひかり「誰かお風呂来なかつた？」

絵里子「誰が」

ため息をついて居間を出て行くひかり。  
絵里子は相変わらず一心不乱にぬか床をこねている。

○同・洋室の前（夜）

ひかりがやってきてドアを開ける。

ひかり「ねえお父さんさあ、さつきー」

PCモニターを眺めていた浩、慌ててモニターを布で隠すと、冷や汗をかいてひかりを見る。

浩「勝手に入るんじゃない！」

ひかり「（面食らって）ごめん」

ひかり、布で覆われたモニターを見て、  
ひかり「え、ていうか、なに？ いい歳して

エロ動画？」

浩「そんなんじゃないよ。なんだ。用があるなら後にしてくれないか」

剣呑な態度にしばし言葉を失うひかり。

ひかり「いやいや、なんでさっきから喧嘩腰なの？ え私なんかした？ 帰って来ない方がよかった？ 邪魔？」

浩、少し冷静になって、

浩「悪い。ちょっと疲れてるみたいだ。一人にしてくれ。申し訳ない」

乾いた笑いを漏らすひかり。

ひかり「マジなんなんだよ」

ひかり、部屋を去る。

○同・二階・ひかりの部屋（夜）

北欧インテリアで統一された生活感の薄い室内。

学習机の上には大学入試の赤本や参考書がきちんと整理されて残っている。ベッドの脇にはキャリーバッグが置かれている。

ひかりはベッドに腰掛けてぼーっとスマホを眺めている。

○（回想）同・庭（夜）

ひかり6歳、ミチル4歳の時の回想。  
泣きながら抵抗するひかりを、浩が  
抱きかかえて物置小屋に連れて行く。

ひかり「いやだ！ やあだ！」

浩「しばらくそこで反省してなさい」

ひかり「助けて！ 助けて！」

○同・二階・ひかりの部屋（夜）

廊下からトイレを流す音がする。

ひかり、そちらを見る。

○同・二階廊下（夜）

電灯を消した廊下にひかりが出てくる  
と、二階のトイレから出てきたミチル  
がちょうど自分の部屋に戻ってドアを  
閉めるところ。

ひかり、部屋の前まで行って、

ひかり「ねえミチル。ちよっと前に電話かけ  
てきたでしょ？」

返事はない。

ひかり「助けてって言うてるように聞こえたけど、なんかあった？ お父さんとお母さんのこと？」

ミチルの声「そう聞こえた？」

ひかり「うん。聞こえた」

ミチルの声「お姉ちゃんは心配性だな」

ひかり「心配するよ」

ミチルの微かな笑い声。

それから沈黙。

ひかり「また明日ね。こっちにいる間にちゃんと話してよ」

ひかり、部屋に戻っていく。

○同・洗面所（日替わり）

何本もの抜け毛が洗面台に落ちている。

ひかり、表情に嫌悪の色を浮かべて、それをティッシュに包むと、ゴミ箱に捨てる。

○同・居間

テレビを見ながら一人で遅い朝食をとっているひかり。

テレビには長崎の被爆者のドキュメンタリーが流れている。

洋室から浩が出てきて冷蔵庫に麦茶を取りに行く。

ひかり「ねえお父さんさ、自分の抜け毛ぐらい自分でちゃんと始末してよ。気持ち悪いんだけど」

立ったまま黙って麦茶を飲む浩。

浩「ひかり。お母さんの言うこと、信用するなよ」

ひかり「は？」

浩「何言われたか知らないけど、常識的に考えてくれ」

ひかり「え、何が？ 何の話」

玄関の開く音。

絵里子の声「ただいまー」

浩、洋室に戻っていく。途中で、

浩「（絵里子）手、手」

絵里子「はいはい、わかってますよ」

それから浩は洋室に入る。

絵里子が居間に入ってきて、テーブルにロールケーキの入ったビニール袋を置く。

絵里子「ごめんね、ちょっと行かなきゃいけない集まりがあつて。これ、ひかり好きだったでしょ」

絵里子、台所から皿とフォークを持ってきてロールケーキを取り分けていく。

ひかり「手、洗わないでいいの？」

絵里子「ん？」

ひかり「手」

絵里子、少し笑って、

絵里子「あんたお父さんみたいなこと言うじやない？」

絵里子の顔を見るひかり。彼女がマスクをつけていないことに気付く。

絵里子「さあ食べよ食べよ」

ロールケーキを食べる絵里子。

絵里子「んー美味しい！ やっぱ最高だね。

ひかりも食べな？」

ひかり、ロールケーキを見て、

ひかり「後でにするよ」

○同・庭

小屋の中で怯えたように小さくなって  
いるマロンをひかりが誘い出す。

ひかり「マロン？ おいで」

マロンは小屋から出てこない。

ひかり「あんたまでどうしたのさ」

小屋から顔を上げて物置小屋を見る

ひかり。

何の変哲も無い物置小屋に見える。

と、ブロック塀に有刺鉄線が張り巡ら

されていることにひかりは気付く。

近づいて有刺鉄線を見る。触ってみる。

ひかり「痛っ」

振り返ると、物置小屋を監視するよう



に監視カメラが設置されているのが目に入る。

## ○同・居間

ひかりが居間に入ってくると絵里子がテレビで昼の情報番組を見ている。テーブルの上には片付けられていない食器類や食べ物がある。

ひかり「ねえ、庭のあれ、なに？」

絵里子「（テレビに）嘘ばかり言ってる」  
情報番組では新型コロナウイルス感染予防のための正しいマスクの着け方、着けるタイミングを専門家を呼んで説明している。

絵里子「マスク中毒で風邪コロナより死者が出てるとは絶対言わないんだから」

啞然としてテレビを見るひかり。

絵里子「あんたもマスクなんかしないでいいからね？ 自分の身は自分で守らないと」と、テレビが消え、他の電化製品も

電源が落ちる。

絵里子「まあた停電！　もう最近多いのよ。  
どうなっちゃってるのかしら」

窓を開けに行く絵里子。

ひかり、玄関に向かう。

絵里子「あ、ひかり！　どこ行くの」

ひかり「冷房のあるとこで涼んでくる」

### ○川沿い

自転車を走らせているひかり。

人も自動車もほとんど通りかからない。

### ○商店街

ひかり、自転車を走らせながら開いて

いる店を探すが、ほとんどはシャッター  
ーが降りている。

### ○駅前のホテル

自転車を停めて電子タバコを吸って

いるひかり。閉まった入り口に貼られ

ている「風邪コロナに騙されるな！  
ワクチンで5G 奴隷化！」という文言  
の貼り紙を眺めていると、

老人の声「もうやってないよ」

ひかりが振り返ると、見知らぬ老人が  
いる。

老人「コロナで観光客来なくなっ  
て、一年二  
年は踏ん張ってたけど、もうダメだね。

ダメだここは」

老人は去って行く。

○シヨツピングモール

人もまばらなモール内をスマホをいじ  
りながらあてどなく歩いているひかり  
すれ違った若い男・赤城（30）が  
戻ってきて、ひかりを指さす。

赤城「広瀬ひかり？」

ひかり「（顔上げて）赤城？」

○同・フードコート

飲み食いしながら話している二人。

赤城「いやあしかし偶然もいいところだよな。

今日これから東京行くって時に。お前逆に  
向こうからでしょ」

ひかり「何しに行くの東京」

赤城「まちよつと色々な」

ひかり、軽く笑う。

ひかり「言えないことかよ」

赤城「でも何年ぶりだ？ お前同窓会とか

来てないよな？」

ひかり「行かないよ仕事もあるし」

赤城「ウチの学校の出世頭だもんな広瀬は。

俺なんてお前このクソ田舎でさあ」

ひかり「出てけばいいじゃん」

赤城「簡単に言うけどお前こっちは色々あんのよ」

ひかり「出たこともないくせによく言うよ。

出たらなんとかなるんだって。アタシ見な  
よ。ん？ ほらこの顔。これで一部上場企

業のプロジェクターですよ」

赤城「顔は関係ねえだろお前。綺麗じゃん  
だいたい」

ひかり「口説くなバカ」

恥ずかしそうに笑う赤城。

赤城「でもそれはさ、やっぱ広瀬が恵まれて  
んだよ」

ひかり「どうしたよ。そんな弱気キャラじゃ  
なかったじゃんさあ」

赤城「世の中を知ったらそうもなる。結局さ、  
勝てないんだわ。分かるかな。雲の上に住  
んでる奴らつーのがいんのよ。支配者層  
っていうのかな。で俺たちはその下でお金  
の雨を降らせてくだせえって雨乞いしてん  
だわ」

ひかり「だったら飛行機乗れよ。飛行機乗っ  
て雲の上飛び出しちゃえ」

赤城「飛行機ねえ。じゃカラオケ行くか」

ひかり「なんでだよ」

赤城「なんで」

ひかり「いや繋がらないよ飛行機の話とカラ

オケ」

赤城「それはそれとしてだろ」

ひかり「それはそれとして嫌だわ」

赤城「え、カラオケだよ？」

ひかり「カラオケだから嫌なんだよバカ

かよ。飛沫感染リスクありまくりじゃん」

赤城「東京の人だなあ」

ひかり「東京とかどことか関係ねえから」

赤城「カラオケ行きたい」

ひかり「ヤダよ」

赤城「今どうしても行きたい」

ひかり「はよ東京行け」

赤城「カラオケ」

ひかり「じゃ一人で行け」

○カラオケ・個室

赤城とひかりがノリノリでデュエット  
している。

○広瀬家・門の前（夜）

門を開けようとして、鍵がかかってい  
ることに気付くひかり。  
玄関チャームを押すと、しばらく経っ  
てエプロン姿の絵里子が家の中からや  
ってくる。

絵里子「おかえり。今日ハンバーグだよ」

門を解錠する絵里子。

ひかり、監視カメラと有刺鉄線を見て、

ひかり「ねえなんでこんな警備嚴重なの」

絵里子「泥棒に入られたのよ」

ひかり「なにそれ。いつ」

絵里子「いつって……いつってこともないけ  
ど」

ひかり「あるでしょ。全然そんな話聞いてな  
いよ」

家の中に戻っていく絵里子。

絵里子「どうでもいいじゃないの。さ、ほら、  
早くご飯ご飯！」

その背中に怪訝な目を向けるひかり。

○同・居間（夜）

アイドルダンスを踊っている絵里子と  
浩。

ひかり「それは毎日やるの」

絵里子「そうよ？　良い運動にもなるんだから。ねえお父さん」

浩「ひかり。手は洗ったか」

絵里子「今はいいじゃないの」

浩「よくない」

絵里子「私だって洗ってないわよ？　ほら。でもこのとおりピンピンしてる」

浩、しばらく踊り続けるが、やがて踊りを途中でやめて洋室に戻っていく。

ひかり、台所に手を洗いに行く。

絵里子「洗わなくていいのよ！」

ひかり「洗うよ。洗う洗う」

○同・二階・ひかりの部屋（夜）

窓を開けて電子タバコを吸っている  
ひかり。



窓は庭に面していないが物置小屋は見え、マロンの鳴き声が聞こえてくる。ひかりが物置小屋を眺めていると、そこに懐中電灯の光がチラチラと庭の方から当てられる。

と、ドアが開いて絵里子が顔を出す。

絵里子「ねえひかり。せっかく帰ってきたんだから部屋にこもってることないでしょー」

ひかり「なにすんの」

絵里子「一緒にユーチューブ見ようよ」

○同・居間（夜）

絵里子のタブレットで各国大統領を

ゴム人間だとする陰謀論の動画を

見せられているひかり。

絵里子は鼻歌を歌いながら台所でぬかみそをこねている。

ひかり「お母さんさ」

絵里子「んー？」

ひかり「こんなの本気で信じてんの？」

絵里子「本気でって何よ」

ひかり「これが本当のことだと思ってるの？」

絵里子「一つの考え方よ。あんたそれなら

テレビに映ってればなんでも信じるわけ？

お母さんこの間カップが出たって話ニュースで見たよ？」

ひかり「それはなんか面白ニュース的なやつでしょ」

絵里子「だったらそれも面白ニュースとして見ればいいじゃない」

言葉を失うひかり。

絵里子「いいですよ、信じるも信じないも

あなた次第。でも自分の身を自分で守るのもあなた次第ですからね。政府は守ってくれないよ。だから核武装だって必要じゃない」

呆れて笑い出すひかり。

ひかり「なんで核の話になるのさ」

絵里子「えー？　そんなおかしい？」

ひかり「もういい、もういい。疲れたから

今日もう寝るね」

笑いながら居間を出て階段を上がって  
いくひかり。

○同・二階・ひかりの部屋（夜）

電気を消して眠っているひかり。

と、廊下からガイガーカウンターの音  
が聞こえてきて目を覚ます。

音は少しづつ部屋に近づいてくる。

そして部屋の前で止まる。

ベッドサイドに何か武器になりそうな  
ものを探るひかり。ボールペンを握る。

それから、ガイガーカウンターの音は  
静かに去って行く。

○同・二階廊下（夜）

暗い廊下にボールペンを握りしめて  
出てくるひかり。

廊下は静まりかえってどこからもガイ  
ガ―カウンターの音はしない。

ミチルの部屋の前まで行って、静かに  
ドアをノックするひかり。

小声での会話が始まる。

ひかり「ミチル？ 起きてる？」

やや間があって、

ミチルの声「起きてるよ」

ひかり「なんか、変な音しなかった？」

ミチルの声「変な音？」

ひかり「がががって、声を枯らしたカエル

みたいなの」

ミチルの声「お父さんじゃないかな」

ひかり「お父さんが何やってんの？」

ミチルの声「お父さんは心配性なんだよ」

ひかり「答えになってない」

ミチルの声「答えは自分で探すものって、

お姉ちゃんよく言ってたよね」

ひかり「ねえ、真剣な話」

ミチルの返事はない。

ため息をつくひかり。

○同・庭（朝）

ドッグフードと水の入った皿を持った  
ひかりがやってきて、犬小屋を覗き  
込む。

ひかり「マロン、おはよう」

しかしそこにマロンの姿はない。

○同・居間（朝）

テレビを見ながら一人で朝食をとって  
いる絵里子。

部屋にひかりが入ってくる。

ひかり「ねえマロンいないんだけど」

絵里子「あらそう？ お父さんがどっか連れ  
てったんじゃないかしら」

ひかり「まだご飯もあげてないよ」

絵里子「運動してから食べるんじゃない？

最近お父さんよくわかんないから」

ひかり「お父さんとお母さんの仲が悪いのは

いいけど、マロンまで巻き込まないでくれない？」

絵里子「マロンパーン！」

突然一発ギャグのようなものをする

絵里子。

ひかり「は？」

○同・洋室（朝）

ひかりが入ってくる。室内は浩の書斎のようになっており、パソコンデスクと本棚、積み重ねた段ボール、プラモデル置き場がある。

ひかり、蓋の開いたダンボールを覗き込むと、中に入っているのは非常食。それからプラモデル置き場に近づいて、ディスプレイされたプラモデルを見る。ロボットや戦車のプラモデルが乱雑に横倒しで積み重ねられていて、その中心には露出度の高い萌え系のフィギュアが一体だけポツンと立っている。

少し顔をしかめるひかり。

プラモ置き場の横に積みまれたプラモの箱の上にマロンの首輪が置かれていることに気付くひかり。

ひかり、それを手に取って眺める。

今度はパソコンデスクに向かう。そこにはジップロックに入ったガイガーカウンターが置かれている。モニターにかかった布をめくると、スリープ状態になっていることがランプの点滅でわかる。

ひかり、キーボードをタッチしてみる。スリープ状態が解除されて、モニターに庭の監視カメラの映像が現れる。カメラは物置小屋を監視している。その映像を怪訝な表情で眺めるひかり。居間から絵里子の声。

絵里子の声「勝手に入るとお父さん怒るよ。

早くご飯食べちゃいなさいよ」

○同・庭（朝）

物置小屋の前に立っているひかり。  
開けようとドアの取っ手に手を掛ける  
が、鍵がかかっている。開かない。  
浩の乗った車が車庫に戻ってくる。  
ひかり、車の方に向かう。

車から降りてきた浩に、

ひかり「ねえマロンは？」

浩「マロンがどうしたんだ」

ひかり「いないんだけど」

浩「いない？ お母さんが散歩でも連れてつ  
たんじやないのか」

揺らすとガシャガシャと金属の当たる  
音がするリュックを背負って玄関に  
向かう浩。

ひかりはそれを引き止め、マロンの  
首輪を見せる。

ひかり「しらばっくれてんじやねえよ。マロ  
ンどうしたんだよ」

首輪を見つめる浩。



浩「勝手にお父さんの部屋に入ったのか」  
ひかり「言ってよ。勝手にマロンに何したわけ？」

玄関から絵里子が出てくる。

絵里子「ねえちよつと、二人ともご飯食べちゃいなさいよ」

ひかり「お母さんちよつと黙っててよ」

絵里子「どうしたのひかり、そんな」

ひかり「それしか言えないの？ マロンがいなくなつて心配じゃないの？」

狼狽する絵里子。

絵里子「お父さんは食べるでしょ？」

浩、無視して家の中に入っていく。

○同・一階廊下（朝）

洋室に向かう浩をひかりと絵里子が追う。

ひかり「言えよ！ なんなんだよ！」

絵里子「ねえ、ご飯」

浩「逃げたんだ。探しに行つてた。気が済ん

だら二度と人の部屋に勝手に入るな！」

洋室に入ってボタンとドアを閉める浩。  
ひかり、苛立たしげに二階に向かう。

絵里子「ご飯、食べちゃわないと。ねえ」  
相手にしないひかり。二階からひかり  
の部屋のドアがボタンと閉まる音。

### ○同・居間

ひかりと浩の分の手つかずの朝食を  
ぼんやりと眺めている絵里子。

洋室からはドリルや電動ドライバ―で  
部屋を改造する音が聞こえる。

食卓に残ったままのぬか漬のキュウ  
リとナスに目を留めると、台所から  
割り箸を持ってきて、それで精霊馬を  
作り始める。

ぬか漬けナスの精霊馬が出来上がる。  
絵里子はそれを立たせようとするが、  
ぐにやりと曲がって立たない。

○同・洗面所

洗濯乾燥機に洗濯物を入れ、スイッチを入れる絵里子。

○同・二階廊下

絵里子が掃除機をかけている。

○同・台所

冷蔵庫の中を覗き込む絵里子。

○同・洋室前

ドアをノックする絵里子。

絵里子「お昼、冷やし中華でいい？」

浩の声「好きにしてくれ」

絵里子「好きになって……」

ひかりが階段を降りてくる。

絵里子「ひかりもお昼冷やし中華でいい？」

ひかり「外で食べるからいらない」

絵里子「どこ行くのよ」

ひかり「外の空気が吸いたいの」

絵里子「そうね、そうね。なら、マスクなんか外しちゃいなさいよ。お腹いっぱい外の空気吸って。気持ちいいよ？」

ひかり、絵里子を見無視して玄関から出て行く。

○同・二階廊下

冷やし中華の載ったトレイをミチルの部屋の前に置く絵里子。

絵里子「お昼ご飯できましたよー」

○同・居間

テレビドラマを見ながらぬか漬けを具にした冷やし中華を食べている絵里子。テーブルの上にはぬか漬けのニンジン、キュウリ、ナス、ダイコンで作った精霊馬が置かれている。洋室から鍵の開く音がして、そこから出てきた浩が居間に入ってくる。

絵里子「なに、鍵なんて付けたの？」

浩「何があるかわからないからな」

絵里子「どういう意味？ それ」

浩、自分の冷やし中華を持って洋室に戻っていく。施錠する音が聞こえる。

○同・洗面所

洗濯物を取り込む絵里子。

○同・和室

洗濯物を畳んでいる絵里子。

その手を止めて、絵里子、何か思い出したように考え込む。

○スーパーマーケット

マスクを付けていない絵里子が特売品の卵をカゴに入れてみると、警備員がやってくる。

警備員「あのうすいません、マスク、いいですか」

絵里子「え？」

警備員「あのう、マスクをつけていたただかな  
いと、すいません」

絵里子「どうしてですか？ マスクをつけな  
いとコロナに感染するんですか？ 今、  
じゃあ私はあなたにコロナをうつしてるん  
ですか？」

警備員「ルールでして。すいません」

絵里子「私は今あなたにコロナをうつしてる  
んですかと聞いているんです」

警備員「いやそりゃうつしてないですけど」  
絵里子「じゃあマスクをしてもしなくても同  
じじゃないですか。どうしてそんなにマス  
クをさせたがるんですか。おかしいと思  
いませんか？」

店員が小走りにやってくる。

店員「（警備員に）どうしました？」

他の客たちが絵里子を好奇の目で見る。

○同・外

空のエコバッグを手に持った絵里子が

外に出てくる。入り口には数人の店員と警備員が集まっている。

絵里子「ええ結構です。もう二度とこんな

お店来ませんから」

店員「申し訳ございません」

絵里子「そのマスク無駄ですよ」

店員「申し訳ございません」

スマホを取り出して店員たちを動画に撮る絵里子。

店員「それ、やめてもらっていいですか？」

絵里子「証拠を撮ってます」

店員「あ、やめてもらっていいですか？」

○広瀬家・台所（夜）

テーブルにぶり大根やゴーヤチャンプルーなどの夕食を運んでいる絵里子。点けっぱなしのテレビにニュースが流れる。

キャスター「今日午後3時頃、東京大手町の新型コロナウイルスワクチン接種会場で爆発があり、

警察は爆発に関与したとみられる男二人を  
現行犯逮捕しました。現場に居合わせた別  
の男についても何らかの事情を知っている  
とみて、警察は現在行方を追っています」  
配膳の手を止め、テレビ画面を見つめ  
る絵里子。

× × ×

絵里子がアイドルダンスを一人で踊っ  
ていると、ひかりが入ってくる。

ひかりは無言で席について、テレビを  
つけてチャンネルを回す。

絵里子「お母さん今日、すっごい失礼な目に  
遭ったよ」

ひかり、テーブルに置かれたぬか漬け  
の精霊馬を手にとって、

ひかり「なんでぬか漬けで精霊馬作ろうと  
思ったわけ」

絵里子「普通にお買い物してただけなのに  
マスク警察がルールですーって突っかかっ  
てきてね」



ひかり「立たないじゃんぬか漬け」

絵里子「ルールを守れない方は来ないでいいですって。そんな身勝手なお店ならこっちから願ひ下げじゃない？」

ひかり「なんでしかも全種類ぬか漬けで作ろうとするんだよ。ニンジンに精霊馬にならないよ。ならないでしょニンジンは」

絵里子「コロナ教よ」

ひかり「なんだよコロナ教って！」

○同・台所（夜）

ぬか漬けをこねている絵里子。

風呂場からはシャワーの音が聞こえる。

ぬか漬けをこねて、こねて、こねて：

そして絵里子は、顔を上げてぬかみそを顔面にぬりたくる。

○同・居間（夜）

パジャマ姿のひかりがタオルで頭を

拭きながら部屋に入ってきてくと、

「NEW LIGHT WORLD 光の戦士」と書かれたTシャツを来た絵里子がアイスを食べながらスマートフォンでツイッタ―をいじっている。点けっぱなしのテレビにはドラマが流れている。その姿を見て呆然と立ち尽くすひかり。

絵里子「ひかり、ちよつと、そこ座って」

ひかり「いいよ、立ったままで。なに」

絵里子「ウチね、核爆弾があるのよ」

ひかり「なに、核爆弾で」

絵里子「ほら、ミチルって昔から手先起用だったでしょう。だから核爆弾作っちゃったのよ」

洋室の鍵が外れる音がして、浩が慌てた様子で部屋に入ってくる。

浩「いい加減にしてくれそんな与太話は！」

絵里子「与太話じゃないわよ。じゃあなんであなた物置小屋をそんなに気にするの。

核爆弾が中にあるからじゃない」

浩「あるわけないだろ！ 常識で考えろ！」

絵里子「じゃあ鍵、渡しなさいよ。ひかりと  
中見てくるから」

浩「お前はおかしい。どうかしてる」

絵里子「どうかしてるのはどっちよ」

ひかり「部屋、戻っていい？」

○同・二階・ひかりの部屋（夜）

服をパジャマから来た時と同じ服に  
着替えたひかりが、床に座ってキャリ  
ーバッグを見つめている。

○同・二階廊下

キャリ－バッグを引いたひかりが部屋  
から出てくる。

階下からは絵里子と浩の口論が聞こえ  
てくる。

と、ミチルの部屋の前にトレーに載っ  
た夕食の空皿が置かれていることに  
気付く。

ひかり、ミチルの部屋のドアを背に

して座る。

ひかり「ねえミチル」

ミチルの声「なに？」

ひかり「お姉ちゃんと一緒に東京行かない？  
部屋なんてすぐに見つかるし、仕事だって  
なんでももあるよ。お姉ちゃんが世話してあ  
げたっていい。そういうの苦手でしょ」

ミチルの声「東京に行つてどうなるの？」

ひかり「どうにでもなるよ。最低でもここよ  
りはマシ。もう一度アイドル目指してみた  
ら？ 今度は変な事務所じゃなくて養成所  
からやり直してさ。レッスン代ぐらい出せ  
るから。ね？ そうしようよ。あんた可愛  
いんだから。お姉ちゃんと違ってさ」

しばしの沈黙。

ミチルの声「ねえお姉ちゃん」

ひかり「どうした」

ミチルの声「私が私の意志でアイドルになり  
たかったことなんて、本当は一度もないん  
だ」

ひかりの顔に動揺の色が浮かぶ。

ミチルの声「でもお姉ちゃんは私がアイドル活動すると喜んだよね」

ひかり「そりゃミチルが元気そうにしてたら嬉しいよ。お姉ちゃんだもん。いいよ、アイドルが嫌なら他のことをやろう。何がいいかな。ミチルの得意なこと、好きなこと。まだ若いんだからなんだってできるじゃん。なんか見つけよ」

ミチルの声「うん、ありがとう。でも大丈夫、もう見つけたよ」

ひかり「なに？」

ミチルの声「新しい世界を作ること」

ひかり「ん？」

ミチルの返事が途絶える。

ひかり「ミチル？ 聞いている？」

返事はない。

○（回想）同・居間（夜）

ひかり6歳、ミチル4歳の時の回想。  
ラジカセから流れる児童アニメの曲に  
合わせて楽しげに踊っているミチルを、  
絵里子と浩はにこやかに眺めている。  
それをひかりがむくれた顔で睨みつけ  
ている。  
やがて、ひかりは手にしたオモチャを  
ミチルに投げつける。オモチャが当た  
り、頭から血を流して泣き出すミチル。  
ミチルに駆け寄る絵里子。

絵里子「大丈夫？」

ひかり「なんでミチルだけ見るの！ ひかり  
の方が上手にできる！」

浩「ひかり！」

ひかりは次々とオモチャをミチルに  
投げつける。

ひかり「妹なんていらなの！」

浩「やめなさいひかり！」

ひかりを押さえつけようとする浩。

ひかりは暴れてなかなか鎮まらない。

浩は強引にひかりを抱えて庭に連れて行く。

浩「こっちに来なさい！」

ひかり「いやだ！ やあだ！」

○同・二階・ひかりの部屋（朝）

ベッドで寝ていたひかりが目を覚ます。

○同・洗面所

浩が洗面台の鏡を血の気の引いた表情で見つめている。

洗面台の上には十数本もの抜け毛。

恐る恐る髪に手を突っ込んでゆっくりと引き抜く浩。指と指の間には抜け毛が何本も挟まっている。

○同・居間

テレビを見ながら一人でカップラーメンを食べている浩。

ひかりが入ってくる。昼食の置かれて

いないテーブルを見て、冷蔵庫を見に行く。

ひかり「お母さんは」

浩「知らない。どっか行ったよ。よくある」

ひかり「今日夜の新幹線で東京帰るから」

浩「そうか」

ひかり「なんか言うことないの？」

浩「なんかってなんだ」

ひかり「ないならいいよ」

部屋を出ようとするひかりを浩は呼び止める。

浩「マロンは生きてるよ。逃がしたんだ俺が。

あんなところにいたら可哀相だから……被爆してしまう」

ひかり「核爆弾なんてないよ。どうかしてるよこの家」

テレビのお昼のワイドショーでウクライナ戦争と米露新冷戦についてコメンテーターがコメントしている。

浩はそれを見て、ぼんやりと、



浩「どうかしているから核を持ちたがるのかな。それとも核を持ってるとどうかしてしまうのかな」

○同・二階廊下

ひかりが階段を上がってきて、自分の部屋に戻ろうとするが、束の間立ち止まり、ミチルの部屋のドアをノックする。

ひかり「ねえ、今日ぐらい顔出さない。お姉ちゃん今日の夜東京帰るから」

ミチルの声「そうなんだ」

ひかり「出てきてよ」

返事はない。

ひかりはドアを開けようとするが、ドアには中から鍵がかかっている。

怒りにまかせてドアを殴りつける

ひかり。

ミチルの声「怒らないで」

ひかり「怒ってなんかないよ。でも顔を見て

聞きたかったの。なんで核爆弾作ったなんてお父さんとお母さんに言ったのか」

ミチルの声「作ったからだよ」

ひかり「あんたは核爆弾なんか作ってない。

それ病気だよ？ わかってないのかもしれないけど」

ミチルの声「お姉ちゃんは私のやることを何も認めてくれないなあ」

ひかり「そういう問題じゃないんだよ！

ねえわかっているの？ あんた今自分がどういう状況に置かれてるか」

ミチルの声「お姉ちゃんはわかってるの？」

ひかり「お姉ちゃんはわかってるよ。少なくともあんたよりはお父さんよりもお母さんよりもわかってる。この家の誰よりもわかってる。みんな狂ってるってこと」

ミチルの笑い声。

ミチルの声「私も同じだよ。そう思ったから核爆弾作ったんだ。外の世界はみんな狂っ

てるから」

ひかり、しばらく黙る。

ひかり「今日帰るからね。もうこの家には来ない。よく考えて。ここに残るか。一緒に来るか。夜になったら返事聞かせてよ」

自分の部屋に戻っていくひかり。

### ○同・洋室

引き出しの中に入っている物置小屋の鍵を見つめている浩。

邪念を振り払うように引き出しを閉じると、積まれたプラモの箱を一つ持ってきて、庭の監視カメラの映像を眺めながらプラモを作り始める。

### ○同・居間

大量の食料品を詰め込んだレジ袋を手に、絵里子が入ってきて、テーブルに一旦レジ袋を置く。

絵里子「ただいまー！ ごめんね遅くなっ

て！　もうスーパーがさあ、遠くの店じゃないと入れてもらえないのよー！　はい　今日はすき焼きですよー！　すき焼きー！　みんな聞いているー？　嫌いでもすき焼き！　ゲッツ！」

誰からも返事はない。

○広瀬家の外観（夜）

○同・居間（夜）

キャリーバッグを引きずったひかりが部屋に入ってくる。

台所では絵里子がすき焼きの準備中。

絵里子、振り返って、

絵里子「まだご飯できてないよ？　あら、

なにその格好。もう帰るの？」

ひかり「今日最終の新幹線予約してある」

ひかり、食卓につく。

支度を続ける絵里子。

絵里子「なんだ、もっとゆっくりしていけば

いいのに」

ひかり「仕事だから」

絵里子「忙しいんだ」

ひかり「うん。新しいプロジェクターだー  
って言ったじゃない」

テレビをつけるひかり。

絵里子「そっかそっか、そうだったね。お母  
さんもうダメだよボケちゃって」

ひかり「まだそんな歳じゃないでしょ」

笑う絵里子。

ひかり、居心地の悪そうな表情。

立ち上がって台所へ向かう。

ひかり「なんか手伝うよ」

絵里子「いいよう、あんたは座ってて。お客

さんなんだから」

ひかり「いやでも」

絵里子「いいの。こういう時ぐらいお母さん  
させて？　ね？　ひかりちゃん」

ひかり「……わかった」

自分の席に戻るひかり。

テレビを見ていると、洋室の鍵が開く音がする。

浩が部屋に入ってきて、食卓につく。食卓に四人分の配膳をする絵里子。

絵里子「あら珍しい！ お父さんも食べるの？」

浩「……ひかり、今日帰るんだろ？」

ひかり「帰るよ」

浩「最後までいいはな。これもう、点けていいのか？」

鍋の置かれたガスコンロのコックをひねろうとする浩。

絵里子「点けちゃって」

浩、ガスコンロを点火する。

それからテーブルにまだ飾られたままのぬか漬けの精霊馬を手取る。

浩「なんでぬか漬けで精霊馬作るんだ」  
ひかり「それ私も言った」

笑う絵里子。

絵里子「あるもんは使わないと損じゃない」

少し笑う浩。

浩「そういう問題じゃないだろ」

表情の緊張を解くひかり。牛脂を鍋に溶かして割り下を入れる。

絵里子が半分ほど入ったオレンジジュースのボトルを持ってきて、浩のコップにつこうとする。

浩「それぐらい自分でやるよ」

ペットボトルを取って自分で注ぐ。

浩「ひかりもほら」

浩、ひかりのコップにもジュースを注ぐ。

ひかり「ありがとう」

食卓について野菜を鍋に入れていく

絵里子。

オレンジジュースを一口飲む浩。

絵里子「さ、食べよ食べよ」

ひかり「いただきます」

浩「いただきます」

絵里子「いただきます」

ひかり、肉を鍋に入れていく。

絵里子「なんか、こういうの久しぶりじゃない？」

ひかり「なにが」

絵里子「みんなが集まってさ、こうやって」

ひかり「一人足りないけど」

立ち上がる浩。

浩「呼んでこようか」

絵里子「あ、いいのよ。お父さんは座って食べてて」

浩「ああ、うん」

浩、座る。

と、玄関ベルの音。

絵里子「お、来た来た」

ひかり「誰？」

絵里子、笑顔を浮かべて玄関に向かう。

ひかり「（浩に）誰か呼んだの？」

浩「さあ。知らない」

しばらく黙ってすき焼きを食べる浩と

ひかり。



ひかり、オレンジジュースを一口飲んで渋い顔をする。

ひかり「これ腐ってない？」

浩「なんかの匂いがうつつたんじゃないか」

玄関ドアが開く音がして、絵里子の笑い声が聞こえてくる。

絵里子の声「いいじゃないせっかくなんだから！　もう作っちゃったわよ！」

男の声「はあ……」

玄関の方を見る浩とひかり。部屋に絵里子と、それに続いて赤城が入ってくる。

ひかり「あ」

赤城「おっす」

絵里子「座って座って。そこ空いてるから」

赤城「どうも、お邪魔します」

席につく絵里子と赤城。

怪訝な表情で会釈する浩。

ひかり「え、なんで来たの」

赤城「あ……」

赤城、困ったように絵里子を見る。

絵里子「あら、なにその言い方。二人あんなに仲良かったじゃないねえ？」

赤城「まだ、こっちいるかなと思って」

ひかり「東京行ったんじゃないかなかったんだ」

赤城「ああ、あれな」

赤城、すき焼きを食べ始める。

浩「手、洗ってください」

赤城、手を止める。

絵里子、赤城を見て、

絵里子「そうね、ウォッシュウォッシュ！」

赤城「あ、はい」

赤城は台所で手を洗って戻ってくる

絵里子「お父さん、赤城くん知ってるでしょ？」

「

浩「……中学の時、ひかりと同じクラスだった？」

赤城「あ、はい、そうです、はい」

絵里子、笑う。

絵里子「忘れてるね。その顔は」

浩「え、今は、何をしてるんですか」

赤城「あ、はい、あの、運送の方を」

浩「あー、運送……」

ひかり、吹き出す。

ひかり「ちよつと待って、お見合いじゃないんだから」

浩「ああそうか」

その場がぎこちない笑いに包まれる。笑いが止んでもひかりだけはクスクスと笑い続けている。

赤城「笑いすぎじゃない？」

ひかり「ツボ入った」

浩、頭を振って、こめかみを手で押さえる。

ひかり「（浩に）別に怒ることないじゃん」

浩「怒ってないよ」

オレンジジュースを一口飲む浩。テレビ画面を見てコップを持つ手が止まる。テレビの夕方のニュースで、ワクチン接種会場の爆破テロの逃走犯の写真が

映っている。その写真は赤城のもの。  
ひかり、不審に思って浩からテレビに  
視線を移し、それに気付く。  
コップを落とす浩。その手は震えてい  
る。食卓にオレンジジュースを吐き出  
そうとする。

絵里子「違うのよお父さん、自分の身は自分  
で守らないといけないじゃない」

ひかり「なんだよ」  
ふらつきながら席を立とうとする浩。

絵里子「赤城くん！」

ひかり「ねえなんだよこれ！」

赤城、動揺しながら浩を取り押さえよ  
うとするが、咄嗟に浩がひっくり返し  
たすき焼き鍋が当たり、身を引く。

赤城「あっつ！」

振り子時計が7時を告げる。

浩、ふらつきながら走って洋室に向か  
う。後を追う絵里子。タッチの差で浩  
は洋室の中に入り、施錠する。

ドアを叩く絵里子。

絵里子「ねえお父さん開けて！　どうしても核爆弾が必要なよ！　遺伝子ワクチンが広がったらもう引き返せないのよ！　みんな壊れてしまいうじやない！　守りたいのよ！　お父さんも！　ミチルも！　ひかりも！　みんな！」

○同・洋室（夜）

非常食のダンボールにもたれかかり、胃の内容物を吐いている浩。  
それからダンボールプラモデルの箱まで四つん這いで向かって、一番下に置いてある大きな戦艦プラモデルの箱を引き抜くと、箱を開ける。  
中にはプラモデルではない、分解された細長い鉄製のパーツがいくつも入っている。

○同・居間（夜）

台所の流しで吐いているひかり。

赤城が後ろから近づく。

赤城「大丈夫だよ、睡眠薬だから。巻き込んだじゃってごめんな。お父さんの持ってる物置の鍵が欲しいだけだから。お母さんに言われたんだよ。俺だつてさ……」

ひかり、赤城を振り払って、そのまま床に崩れ落ちる。

ひかり「裏切り者」

失望の眼差しで赤城を睨みつけて、意識を失う。

どうしていいか分からずその場に立ち尽くす赤城。

絵里子が居間に入ってくる。

絵里子「ひかりは？ どこ？」

赤城「あ、こっちです」

絵里子「（来て）寝てるね。部屋、連れてって」

赤城「あ、はい」

赤城、ひかりを背負って二階に向かう。

玄関ベルの音。

絵里子「開いてますよー！ 入ってくださいー  
い！」

水道水をコップに入れて飲む絵里子。  
すぐにそれを吐き出す。

「NEW LIGHT WORLD 光の戦士」と書か  
れたTシャツを来た中年男女、光の戦  
士1と光の戦士2が入ってくる。

光の戦士1「パッケンチヨは」

絵里子「うんこっち」

玄関へと向かう絵里子。

光の戦士1・2も続く。

絵里子「あ水道水飲まないでね。5Gの味が  
する」

○同・庭（夜）

物置小屋の前に来ている絵里子と光の  
戦士1・2。  
ドアを開けようとする光の戦士2。  
開かない。

光の戦士2 「ダメ。固い」

光の戦士1 「どうしよう。道具持ってきて

こじ開けてもいいけど」

絵里子 「爆発するかもわからないじゃない！

鍵はお父さんの部屋にあるのよ」

光の戦士1 「じゃそっちから開けるか」

○同・洋室（夜）

浩、先程のパーツを組み立てる途中で眠ってしまったている。

そのパーツは散弾銃の形を成している。

○同・洋室の前（夜）

遮光ゴーグルと粉塵マスクを着けた

光の戦士1が丸鋸で洋室のドアのノブ上を切断し始める。

○同・居間（夜）

光の戦士2の前で赤城が「NEW LIGHT

WORLD 光の戦士」のTシャツに着替



える。

光の戦士2「もう隠さないでいいね」

赤城、笑顔を浮かべて、

赤城「はい」

落ち着かない様子で光の戦士1を眺めている絵里子。

ふと思いついて、ラジカセを持ってくると、アイドルソングを再生する。

赤城「なんですかそれ」

絵里子「だってうるさいじゃない」

○同・洋室の前（夜）

丸鋸を一旦止める光の戦士1。

十センチほどできた切断面から中を覗くと、デスクに突っ伏している浩が見える。

光の戦士1「ごめんねー！　もうちょっとで終わるからちよつと我慢してねー！」

再び丸鋸の電源を入れて切断に入ると、室内の電気が消える。

光の戦士1「あら？」

○同・居間（夜）

窓を開けに行く絵里子。

絵里子「まあた停電だ。困ったねー」

赤城「絵里子さん窓は開けない方が」

絵里子「暑くない？」

赤城「今は、平気です」

絵里子「あそう」

○同・ひかりの部屋（夜）

眠っているひかり。悪夢を見て表情を歪ませる。

○（回想）物置小屋の中

真っ暗闇。6歳のひかりは、ドアをドンドンと叩いて泣き叫んでいる。

ひかり「開けてー！開けてってばー！

暗いよ！怖いよ！」

ズル、という音が後ろからして、ひか

り、固まる。

冷や汗をかきながら恐る恐る振り返ると、そこにはおすわりをしたマロンがいて、ひかりを眺めている。

### ○広瀬家・洋室の前（夜）

ドアノブの上に四角い穴が開いて、光の戦士1は穴から手を突っ込んで鍵を開ける。

光の戦士1「開いたよー。絵里子さーん、鍵、開いた」

光の戦士1がドアを開けると、そこには散弾銃を手にした浩が立っている。光の戦士1に向けて引き金を引く浩。至近距離で散弾を浴び、吹き飛んで壁に激突する光の戦士1。絶命。  
洋室から出てきた浩を絵里子と赤城が驚きの表情で見つめる。

絵里子「お父さん、そんなのどこから持ってきたの！」

二人に向けて引き金を引く浩。  
赤城は咄嗟に身を引いてかわすが、  
絵里子は散弾を腹に受けて倒れる。  
玄関が開く音がして、浩が振り返ると、  
光の戦士2が逃げるところ。  
浩、慌てて引き金を引くが弾切れ。  
装填しながら追いかける。

○同・玄関前、門の外（夜）

逃げる光の戦士2を浩は撃つが、すん  
でのところで門の外に出て当たらない。  
外に止めてある反ワクチン団体の街宣  
車に乗り込む光の戦士2。  
エンジンをかけようとしたところで、  
フロントガラスの前に浩が現れ、ガラ  
スごと光の戦士2を撃つ。  
光の戦士2の頭部が吹き飛び、反動で  
拡声器のスイッチが入る。

拡声器越しの声「ニューワールドオーダー。  
マスクを外しましょう。ニューワールド

ジャステイス。ワクチンを拒否しましよ  
う」

浩は装填しながら家に戻っていく。

○同・居間（夜）

浩が室内に入ってきて部屋を見回すと、  
そこに赤城の姿も絵里子の姿もない。  
床の血の跡が台所まで続いている。  
浩がそれを追っていくと、そこには  
ぬか床に頭を突っ込んだ絵里子の死体  
がある。  
と、浩は突然洋室に向かって走り出す。

○同・洋室（夜）

デスクに駆け寄って引き出しを開ける  
浩。  
そこに鍵はない。  
ダンボールの影に隠れていた赤城が  
突進し、手にした丸鋸で浩の背中から  
脇腹を切りつける。

赤城「ゴム人間！」

浩は絶叫して、振り返りしな散弾銃の銃身を赤城の頭にぶつける。

赤城はよろけ、浩、赤城を撃つ。廊下に倒れ込む赤城。

浩の脇腹から内蔵がこぼれ落ち、浩はプラモ置き場に倒れる。

○広瀬家の前（夜）

街宣車から流れ続けるメッセーヂに、近隣住民たちが一人また一人と集まって来る。

○同・二階・ひかりの部屋（夜）

ひかり、激しく咳き込んで目を覚ます。頭痛に頭を抱える。外から聞こえる街宣車の音に耳を澄ます。

ひかり「ミチル……」

ひかりは足場を確かめながら立ち上がると、ふらつきながらミチルの部屋へ

と向かう。

○同・二階廊下（夜）

廊下に出てきたひかりはミチルの部屋の扉が開いていることに気付く。

ひかり「ミチル……いるの？」

部屋の前まで来るひかり。中を見ると、全裸で丸坊主のミチルが暗闇の中に立って窓の外を眺めているのが見える。呆然と立ち尽くすひかり。

ミチル「ねえお姉ちゃん、なんでお姉ちゃんはそんなに私を連れ出したいの？」

ひかり「助けてって……言ったじゃん」

笑うミチル。その笑い声は最初に電話を受けた時にすすり泣きに聞こえた声と同じだ。

○（回想）同・居間（夜）

真っ暗闇の中でパジャマ姿のミチルが固定電話でひかりに電話をかける。

ひかりの声「はい」

こみ上げる笑いを押し殺すミチル。

ひかりの声「ミチル？」

ミチル「名付けて」

ひかりの声「なに？ 今度はどうしたの？」

笑いを押し殺すために、放射線熱傷で

焼け爛れた手で口元を覆い隠すミチル。

ひかりの声「ねえ。こんな夜中にふざけない

ですよ。お姉ちゃん暇じゃないんだよ」

ミチル「新しい世界が来るから」

○同・二階・ミチルの部屋（夜）

ミチルの背中を見つめるひかり。

ミチル「お姉ちゃんはいつもそうやって自分

に都合良く現実を書き換える。だから私も

そうする。世界を新しくするんだ。ねえ、

お姉ちゃんなら新しい世界を何て呼ぶ？」

振り返るミチル。その顔面と胴体は

放射線熱傷で焼け爛れている。

一歩一歩ひかりに近づくミチル。ひか



りは後ずさる。

ミチル「どうしたの？　助けてくれるんじゃないの？」

ひかり、階段から足を踏み外し、転げ落ちる。

○同・一階廊下（夜）

赤城の死体の上に倒れ込むひかり。それに気付いて、驚きの眼差しで周囲を見渡すと、どこも血まみれ。

ひかり「お母さん！　お父さん！」

ミチルはゆっくりと階段を降りてくる。ひかりは痛みをこらえて立ち上がり、赤城の手の先に落ちている物置小屋の鍵を目に留めると、それを拾って、片足を引きずりながら外へと向かう。

○同・玄関前（庭）（夜）

玄関を開けると、外には街宣車の声に引きつけられた近隣住民たちが集まっ

ている。その好奇の眼差しを一身に集めるひかり。

まだ意識が朦朧としているひかりの目には、近隣住民たちがみんな「NEW

LIGHT WORLD 光の戦士」のTシャツ

を着ているように見える。

ミチルがすぐ背後に迫っている。

ひかりは振り返ってミチルを見、また振り返って近隣住民を見、そして庭へと逃げ出す。

物置小屋に駆け寄ると、震える手で鍵を開けようとする。

ひかり「こんなの嘘だよ！ 全部妄想なん

だ！ お姉ちゃんが今見せてあげるから！

お姉ちゃんが今助けるから！」

鍵が開いて、ひかりは物置小屋のドアを開ける。

目に飛び込んできたのはブルーシートを被せられた大きなツボのような形状の物体。

ひかりは物置小屋の中に入ると、急いでドアを閉める。

○同・物置小屋（夜）

ドアを必死で押さえるひかり。

ミチルの声「お姉ちゃん、覚えてる？」

ひかりは泣いている。

ひかり「なにが」

ミチルの声「ずっと昔もお姉ちゃんはそうやってそこに逃げ込んだ」

ひかり「なんのこと」

ミチルの声「本当はずっとそうだったんじゃない？ 東京で成功してるなんて嘘だ。

見たくない現実から逃げて、逃げて、逃げて、辿り着くのはいつも同じ物置小屋なんじゃない？ 私を助けたかったのならどうしてすぐに来てくれなかったの？ 逃げたい自分からも逃げたから、ミチルを助けるひかりを演じるしかなかったんじゃないの？」

ひかり「違うよ」

それからもう一度、今度は力を込めて、  
ひかり「違うよ！」

沈黙。

ミチルの声「お姉ちゃんにはできないよ」

○（回想）同・居間（夜）

ひかり6歳、ミチル4歳の時の回想。  
ラジカセから流れる児童アニメの曲に  
合わせて楽しげに踊っているミチルを、  
絵里子と浩はにこやかに眺めている。  
それをひかりが泣きそうな顔で睨みつ  
けている。

やがて、外に向かって駆け出す。

浩「ひかり！」

絵里子「ひかり！　どこ行くの！」

○（回想）同・庭（夜）

泣きながら玄関から出てきたひかりが  
物置小屋に逃げ込んでドアを閉める。

絵里子が追いかけてくる。

○（回想）同・物置小屋（夜）

泣きながらドアを押さえつけている  
ひかり。

ドアを絵里子がドンドンと叩く。

絵里子「ひかり、開けて。どうしたの」

ひかり「なんでミチルだけ見るの！ ひかり  
の方が上手にできる！」

絵里子「そうかそうか、わかった、ごめん  
ね」

ひかり「妹なんていらなの！」

○同・居間（夜）

全裸のまま食卓の椅子に座って、虚空  
を眺めているミチル。

床に転がっているひかりのキャリアバ  
ッグに視線を落として、近づくと、  
開ける。

中には何も入っていない。

○同・物置小屋（夜）

泣き止んでいるひかり。  
俯いていた顔を上げる。

○（回想）オフィスビル・エレベーター

桂木とひかりが乗っている。

空間除菌タブレットを忌々しげに外す

桂木。

ひかりは真顔で正面を見つめたまま、

ひかり「桂木さん、私ってなんなんですか？

キャバ嬢ですか？ 営業部の」

桂木「そりや言いたいこともわかるけどさ、

合わせないと」

ひかり「合わせるって、何にですか」

桂木「そういう世の中じゃん。俺だって気は

進まないけど、そういうもんだよ……いや

俺だってさ、昇進の話も最初断ったんだよ。

広瀬さんの方が実績もやる気もあるからっ

て。本当に。これ信じて。でもさ、決める

側は頭古いんだよ。なんだって決める側は  
そうじゃん。だから俺たちもそれに合わせ  
ないとき……」

○ 広瀬家・物置小屋（夜）

ひかり、振り返って、ブルーシートに  
覆われたツボのような物体に歩み寄る。

○ 同・居間（夜）

ミチル、ラジカセのアイドルソングを  
再生して、踊り出す。

○ 同・物置小屋（夜）

ツボのような物体を見つめ、そして、  
ブルーシートを一気にめくるひかり。

○ 山の斜面（朝）

首輪のついていないマロンが草の匂い  
を嗅いだりしながら歩いていると、  
突風に木々が揺れ、マロンは驚いて振

り返る。

遠くの住宅街にキノコ雲が上がっているのが見える。

マロンはしばらくそれを眺めているが、やがて山の上の方へと逃げていく。

(了)